

東方キリスト教における靈性

土橋茂樹

はじめに

土橋と申します。よろしくお願いします。

イエス・キリストを介して三位一体の神に向かおうとする人間の信仰のありようを意味する「キリスト教の靈性」、これは、東西のキリスト教に関わりなくキリスト教全般の靈性ですが、特にイエスの現存、つまり、受肉した靈的・身体的存在であるイエス・キリストとの全人的交わりを強調するのが東方キリスト教の特徴であります。そのことが具体的に何を意味しているのか

を、今日は順を追ってお話していくことになります。

本題に入る前に、非常に珍しい写真展のご紹介をしたいと思います。そもそも東方キリスト教の一番の聖地・聖山は、ギリシア北東部のアトス半島先端部にそびえるアトス山というところですが、そこでは修道士たちが日夜祈りと修徳修行に勤しんでいます。そのアトス山に入るには、船で行くか、あるいは陸路で険しい山を登って行くしかありません。しかも女人禁制で、ギリシア正教徒以外には厳しい入山規制があります。ですから、普段は普通の日本人はアトス山に入れません

んし、まして修道士たちは写真を撮られるのを非常に

嫌います。そんな中、正教会の司祭をやっておられる

中西裕一先生（日本大学教授）の息子さんでプロの写真

家の中西裕人さんが、今、銀座でアトスの修道士たち

の姿を伝える写真展を開催しておられます。お父さん

の中西司祭が、長年にわたり通算三十数回もアトスに

通って友人もたくさんおられるからこそ、その息子の

裕人さんも特例的に写真家として受け入れてもらい、

私たちが普段窺い知ることのできないアトスでの修道

士たちの生活ぶりが手に取るようにわかる貴重な展覧

会となっています。銀座で開かれるのは明日までです

が、今後第二弾、第三弾と続けられるそうです。私が

所属している学会誌に、その何枚かでもぜひカラーで

掲載したいと考えておりますし、いずれ写真集が出る

かもしれません。そうしたカラー写真が何点かあれば、

今日の私の話などよりも、東方キリスト教のイメージ

がより一層鮮やかにわかっていただけるのですが、残

念ながらまだお見せできるものが手元になく、私の拙

い話で我慢していただくしかありません。

1 東方キリスト教とは何か

東西二つのキリスト教

ある程度基礎的な語彙を説明していくのが順序とし

てはよろしいかと思います。まず、そもそも東方キリ

スト教とは何か。ごく初期の頃からキリスト教は大き

く東と西に分かれます。大雑把に使用される言語で言

うと、例えば『聖書』にしてもラテン語の翻訳を使っ

て読んでいくのが「西方キリスト教」で、西ローマ帝

国とはほぼ一致する地域で信仰され、ローマが中心とな

ります。

東方キリスト教のほうはどうかと言いますと、もと

もと『新約聖書』はギリシア語で書かれていました。

他方、ユダヤ教の經典である『旧約聖書』はヘブライ

語で書かれていましたが、（伝承によれば）紀元前三世紀

にイスラエル一二部族から各六名ずつ、計七十二人のギ

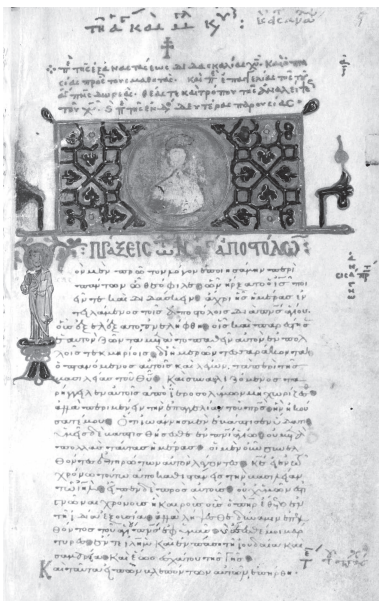
リシア語のできるユダヤ人学者によってヘブライ語から

ギリシア語に翻訳されたという意味で（ただし紀元前

一世紀頃までに人数は七十人と変えられ）『七十人訳』と呼

ばれるものを東方キリスト教徒たちは使っていました。ですから、東方キリスト教圏の人はギリシア語で『旧約』も『新約』も読めたということです。

言うまでもありませんが、言語が翻訳されていくときには必ずちよつとしたズレが出て来ます。だから、ヘブライ語で書かれた内容とギリシア語で書かれた内



ギリシア語の新約聖書写本（12世紀）。「使徒言行録」の冒頭部分。ミナスキュール（minuscule）と呼ばれる写本書体で書かれてゐる（Minuscule 1 [Gregory-Aland]: Codex Bezae Cantabrigiae A. N. IV. 2 / 第5葉右頁）

容は、同じ『旧約』であつても少しズレが出てきます。

このことに関連して、近年、宮本久雄先生が提唱しておられる「エヒイエロギア」について少し触れておきたいと思います。この独創的な神学理論は、モーセ五書の一つ『出エジプト記』三章一四節における「われは在りて在るものなり」という神御自身による神名の啓示に基づくもので、ヘブライ語の存在動詞「ハヤー」の一人称未完了形「エヒイエー」に由来します。それを『七十人訳』がギリシア語に訳す場合、そこでは当然ギリシア語の存在動詞「エイナイ」の一人称現在形「エイミ」が用いられますが、その際、それら二つの言語が持っている根本的性質がどうしても微妙なところで、しかし極めて根本的な仕方で異なってくるわけです。ギリシア語で「在るもの」と言うと、どうしても物という塊、なんらかの「もの」というイメージが出てくる。ところが、ヘブライ語で「在りて在るもの」というのは、あたかも風のように「在る」わけです。だから、ギリシア語で表すと物のように「在る」神ですが、ヘブライ語で言うと、同じ「在りて在るもの」

と言っても、風のようにあそこにもここにも遍在するのであって、そのニュアンスが全く違ってきます。

だから、宮本先生は「エヒエロギア」を提唱することによって、ギリシア的にとらえられた「神」理解（ハイドガーのいわゆる「存在・神・論」）が結局、最終的にはアウシュビッツのホロコーストにまで至るようなある種の間違った道を歩ませたのであって、ヘブライのエヒエロギアを今一度思い起こすべきだということのようなことを力説しておられます。ということは、同じようにして今度は、ラテン語に『新約』なり『旧約』なりが訳されていくと、ギリシア語圏のキリスト教の理解と、ラテン語圏のキリスト教の理解にも当然ある種のズレが出てくるに違いありません。そういう古代の重要な言語がもっている特性の差異というものがおそらくは少なからず影響したことによって、やがてキリスト教は東と西に分かれていきます。

キリスト教が東方キリスト教と西方キリスト教に分かれると、東方キリスト教のほうはさらにカルケドン派と非カルケドン派に分かれます。「カルケドン派」と

いう名称は、要するに、人性と神性の両性を備えているというイエス・キリストの理解の仕方を決定した「カルケドン全地公会議」（四五一年）に由来したもので、その立場に立つものがカルケドン派です。これは、東方だけではなくて西方のキリスト教もすべて、カルケドン派の立場に立つ限り、「キリストは人間であり、かつ神である」という理解をとります。

他方、東方キリスト教のもう一つの立場すなわち非カルケドン派とは、「単性論」と呼ばれるもので、イエス・キリストのあり方は、人性と神性の両方があるのではなくて、「人性を吸収した神性だけがある」という立場をとります。これは、ネストリウス派であるとかコプト教会などで、単性論をとる諸派です。このネストリウス派というのは、エフェソス全地公会議（四三一年）で異端として排斥され、その後中国に渡り、これは皆様のほうがよく御存じだと思いますが、唐代中国において、景教（「大秦景教流行中国碑」で知られているあの景教です）として命脈を保っています。

いずれにせよ、一般的にはカルケドン派が「東方正

教会」と呼ばれます（非カルケドン派のほうは「東方諸教会」と呼ばれたりします）。身近なところでは、御茶ノ水にあるニコライ聖堂が東方正教の聖堂として有名ですね。

東方正教会にはロシア正教、ギリシア正教、ルーミア正教、セルビア正教などがありますが、これらはどこが違うのでしょうか。例えば、カトリックとプロテスタントのように違うのかというと、そうではありません。これらはすべて「東方キリスト教」としての伝統とギリシア式典礼（正教の用語では、「奉神礼」）を継承している点で同一です。ただ、当然のことながら国・民族によって使っている言語が異なります。そうすると、典礼は自らの言語で行わねばなりません。ロシア語で行う、ギリシア語で行うというわけで、ロシア正教、ギリシア正教となった、ただそれだけのことです。根本教義に関してはすべて同一に、「東方正教」ということになりました。

それに対して西方キリスト教では、カトリックに抗して、近代に入ってプロテスタント、さらにアングリカン・チャーチに当たる英国聖公会が出来ます。

ですから、キリスト教と一口に言っても、それだけの分派がありますが、今日私がお話ししていくのは主に東方のカルケドン派の話ということになります。

東と西のキリスト教のそれぞれの領域分布について言えば、ローマ帝国の東西分裂（三九五年）以降は、大體東ローマ帝国（後のビザンツ帝国）の分布とほぼ一致するのが東方キリスト教、西ローマのほうと一致するのが西方キリスト教です。ただ、現在は信者が全世界に広がっていますから、その分布は意味をなしません。当初は東西のローマ帝国に応じて分布していたと考えておけばよいと思います。その後決定的に両者が分裂したのは、「大分裂（大シスマ）」と呼ばれますが、一〇五四年に決定的な分裂を迎えて、未だに東西は完全な和解には至っていません。フィリオクエ問題というのがその原因となっています。

フィリオクエ問題

まず、「信条」（正教では「信経」と呼ばれるものから説明しましょう。「信条」というのは信仰告白のような

もので、英語でクリードと言いますが、ラテン語の「クレド」(「私は信じる」)に由来する言葉です。最初は個人的な信仰告白でかまわないわけですが、紀元四世紀に入り、キリスト教が公認され、ローマ帝国の国教となっていくにつれて、教義や信仰の正統性の確立が求められるようになっていき、そのために各地の教会の司教たちが集まって全地公会議を度々開催するようになります。「キリスト教の信仰はこういう原理に基づいて行おう」という方針を決定し信条の文言を一字一句定めていくわけです。そこで、様々な間違った考えと正しい考え、つまり異端と正統が仕分けされていきます。

そうした信条の中でも、三二五年のニカイア全地公会議で決定された「ニカイア信条」というのは、現在も使われている極めて影響力の大きな信条です。元になるテキストは消失してしまいましたが、幸いなことにカイサレリアのバシレイオスという司教が全部書き写していたものが書簡に残っています。以下に私が翻訳したものを紹介します。

「私たちは一なる神、全能の《父》、見えるものと

見えないものすべてを創造した方を信じる。」

これは、一般論で、父なる神への信仰が説かれますが、次の段落に入ると子なる神、イエス・キリストへの信仰がテーマとなります。

「また、私たちは一なる主イエス・キリスト、神の《子》、父から生まれた独り子、すなわち、《父》の《ウーシアー》から生まれたものを信じる。神からの神、光からの光、真の神からの真の神、生まれたものであつて造られたものではない、《父》と《ホモウ・シオス》であるその方を。」

直訳すると、「ウーシアー」は「本質」、「ホモ」は「同じ」という意味なので、「ホモウ・シオス」とは「同一本質」と訳せます。つまり、父なる神と子イエスは本質が同じだという意味です。

「天と地にあるすべてのものはその方によつて成つた。」(つまり、天地創造したのは《子》イエスだというわけです。)
「主は、私たち人間のために、また私たちの救いのために降り、肉となり、人間となり、」
「これは受肉のことです。」「苦しみを受け、」(十字架

に磔になって、そして」「三日目によりがえり、」「復活し、」「天に昇り、生者と死者とを裁くために再び降り来たる。」「これは、「最後の審判」のことを言っています。」

以上の長い部分が、私は《子》である神キリストを信じますという信仰告白の名を借りて、《子》イエスがどういう存在かを規定している箇所です。

「私たちはまた、聖霊（正教用語では「聖神」）を信じる。」

御存じのように三位一体（正教用語では「至聖三者」とは、父と子と聖霊という三つの位格（ヒュボスタシス）・一つの本質（ウーシア））ということですから、ここでの信仰の対象も当然そのような三位一体の神でなければなりません。

次の段落はアナテマと言って、しかしかのような人々を破門するという異端宣告です。

「対して、《子》がいないときがあった」とか、『《子》は生まれる前には存在しなかった』とか、『《子》はないものから生じた』とか、『《子》は《父》とは』

異なる『ヒュボスタシス』や『ウーシア』から成る』と言う者たち、あるいは『神の子は変化し変異するものである』と言う者たちを、普遍的な使徒的教会は断罪する。」

ここで断罪されているのが、アレイオスという人を頭とするグループ、アレイオス派と呼ばれる人たちです。アレイオスはギリシア語読みで、ラテン語読みするとアリウス。だから、「アリウス論争」とも呼ばれますが、この古代末期の大きな神学論争を引き起こした異端がアレイオス派です。

初期キリスト教世界で常に大きな問題になっていたのは、キリストの位置づけで、「キリスト論」(Christology)と呼ばれます。キリストは、確かに人間だったわけですから。実際この世の中に来て磔にあつて死ぬわけですから。しかし、同時に神でもあるというのはどう考えても不合理なわけです。人間なら人間、神なら神ではないかという普通の合理的な考え方でいえば、どちらかに統一すべきだろうということで、アレイオス派は「キリストは人間である」という立場をとりました。

子・イエスも神が創ったものの一つだということです。
ところが、キリスト教の不思議なところは、合理的



ロシアの画家ワシーリー・スリコフが描いた「第四全地公会議（カルケドン公会議）」（1876年。ロシア美術館所蔵）

な考え方では解釈がつかないような不思議な立場のほうがむしろ正統となっていく傾向があるところです。だから、この場合も「イエス・キリストは人間か神か」ではなく、「キリストは人間であり、かつ神である」。論理的に言うとは矛盾になるような命題のほうを敢えて採っているわけです。合理的な考え方をする人たちは、「いや、神は父なる神一つであって、子・キリストはあくまで人間であって神ではない。聖霊も同様だ」と考えました。こうした考え方のほうが、私たちからするとよほど合理的に理解できますが、キリスト教はそうしたすっきり割り切れる神理解の途を敢えて採ろうとはしなかったわけです。

その後、コンスタンティノポリス公会議（三八一年）においてキリストの立場を明確に規定した先の信条が補強された「ニカイア・コンスタンティノポリス信条」が全キリスト教会の統一信条となっています。しかし、もともと一筋縄ではないかない神理解、とりわけ不合理なキリスト理解に基づく信条だけに、その後もキリストの身分に対する異論が百出しました。そこで、

先ほどご紹介した「カルケドン全地公会議」において、イエス・キリストにおける人性と神性の二つの本性は互いに「混合されることなく、変化することなく、分割されることなく、分離されることがない」と宣言され（このような考え方を「両性論」と言います）、それに異議を申し立てる立場は異端として排斥されたのでした。したがって、キリスト教徒とは、このような神、つまり三位一体の神、人にして神なる「神人」を信ずるものだという本質規定がニカイア・コンスタンティノポリス信条には込められているわけです。これはどの宗教でもそうですが、自分が何を信仰しているかというその信仰対象が何であるかはその宗教の核心であり、だからこそ尊崇し信仰する神の本質が規定されている文言つまり信条をむやみに変えることなど絶対に許されないはずです。なぜなら、それはその宗教にとって最も根本的なことだからです。

ところが、これほど重要なニカイア・コンスタンティノポリス信条の小さな語句の改変をめぐって、東西のキリスト教の対立は決定的となります。それがいわゆる

「フィリオクエ問題」と呼ばれる事件です。先に触れたコンスタンティノポリス公会議で規定された聖霊に関する信仰箇条として、私が何を信じるかと言えば、それは「父から出た」聖霊です。ところが、日本カトリック司教協議会の公式の訳によれば、「父と子から聖霊が出て」と書かれています。つまりこれが、西方カトリックの公式の信仰規定となるわけです。本来、キリスト教の肝となるべき根本信条を表す文言、たとえば一言一句といえども改変が許されない根本教義が、わずかに数語（ラテン語では*filioque*一語）とはいえ、東と西で明らかに異なった表現になってしまったのです。

つまり、「父から出た」と文字どおり決定された内容と文言を信じ続けているグループが東方キリスト教であるのに対して、「（ ）と子から（フィリオクエ）」という言葉を付け加えたのが西方キリスト教というわけです。信仰にとつて最も根本的な信条、信仰告白を勝手に変えることは異端中端と言えます。したがって、東方キリスト教陣営は、西方に対して、この暴挙を許さないという立場をとったわけです。

それに対して西方は、いろいろと言いつめた法的解釈を弄して、これは決して違法ではないということ、最終的にさっき言いました大分裂のときに分裂するわけです。それから約九百年を経た一九六二―六五年に開催された第二バチカン公会議において、ローマ・カトリック教会はあらゆる宗教と対話をしていこうというエキュメニズムの立場を採択したわけですが、東西のキリスト教の肝心のこの部分に関しては、西方は相変わらず頑なな姿勢を崩してはいません。

私たち日本人からすると、「()」と子から(フィリオクエ)」という語句を取ってしまえば済むだけの話だと思うのですが、彼らからするとこれは意地というか、千年以上にわたる伝統があるので、軽々には変えられないでしょう。東方側は、西方がこの「と子から」という表現を削除するならば、今までの軋轢は一切忘れ、私たちはあなたたちを同じ信仰者として受け入れますと、そこまで胸襟を開いてくれます。ところが、その最後の一步が踏み出せずに、未だに東と西は最終的な和解には至っていません。

2 三位一体論争

教父学とは何か

これまでお話ししてきましたように、四世紀に、殉教の時代から公認宗教として教義を確立していく段階に入るところで、どうしてもいろいろな人たちの聖書解釈がぶつかってしまい、様々な立場の間で神学論争や容赦ない政争が繰り広げられることとなりました。そのような混沌とした状況下にあつて、全教会が統一的な見解をもつためには、キリスト教会のトップレベルの聖職者たちが集まって全地公会議という会議を行う必要があつたわけです。その最初の大きな教義論争は「三位一体論」という形で展開されました。

かくして「三位一体論」の話に入るわけですが、その前に、初期キリスト教の成り立ちを研究していくのはどんな学問が行うのか、その点について少し触れておきます。例えば、私たちが知っているいろいろな学問の名前、宗教学があり、神学があり、聖書学があります。そして、これからお話しする「教父学」という

ものがあります。私が主に研究しているのは教父学の分野になりますが、一体、教父学とはどういう学問なのでしょう。

教父学 (patristics) とは、一言でいえばキリスト教文献史学であり、どちらかというと歴史学の分野に属し、キリスト教古代の神学的著作を扱う学問分野です。そもそも、教父学というときの「教父」とは何かということについては、キリスト教神学の観点から厳密な規定がありますが、意味はそのまま「教会の父」(ラテン語で *pater ecclesiae*) とご理解いただければ十分です。

厳密な意味で「教父」と言う場合は、古典性・古代性と正統性が必須の条件となります。ところが、例えばオリゲネスという重要なギリシア教父の場合、二・三世紀の人なので古代性の条件は問題なくクリアしているのですが、これまでの正統キリスト教の中では異端とされており、正統性の条件で引つ掛かってしまっていたわけです。本来、異端とみなされた人物は教父とみなされることはできませんが、オリゲネスのようにに有力な教えをもたらした人物抜きにギリシア教父史

を語ることはできません。そんなわけで、教父研究における「教父」規定と、キリスト教教会における「教父」規定の間に少しズレが出てきています。したがって、私がここで言う「教父学」とは、正統性の点では多少緩められたものとお考えください。

いずれにせよ、教父学というのは、キリスト教の初期の段階で、教義を確立していったような人たちの教えを扱う学問ということです。その場合、教父学が扱う分野は、歴史学、文学、哲学、神学、あるいはその総体を含んでいく形になります。ただ、教父学を、文字どおり教父に関する学(ラテン語で *pater* (父) 複数形は *pateres*) というのは *father* (父) ですから *pateres* に関する諸々の言説」とすると、これはパトロロギア (*patriologia*、英語で *patriology*) と言い換えることもできます。とすれば、当然それはロゴスの学ですから、そこには「哲学」も含まれるはず。しかし、テオロギア・パトリステイカ (*theologia patristica*)、*「教父神学」*と理解するなら、神学と哲学というのは分かち難く結ばれるわけですが、信仰者にとって、自らの信仰と哲学の関係

はある場面では非常に切迫した問いとなってくるはず
です。

神学も厄介な学問ですが、哲学もまた一般の方から
すると近寄り難い学問かもしれません。私が今日お話
していくような教父学のアプローチの仕方は、日本
語で言うところと教父哲学に当たるものだと思います。で
すから、教父に関して哲学的なアプローチをしていく、
そういう学問分野とお考えください。

なぜギリシア哲学が教父思想に欠かせないのか

では、なぜギリシア教父思想には哲学が必要なので
しょうか。例えば、先ほどのニカイア信条の中で、わ
ざわざ日本語に訳さないで「ウーシアー」とか、「ホモ
ウーシオス」などとカタカナ表記にしたのは、それが
ギリシア哲学の用語であることを強調したかったから
です。「ウーシアー」というのは、アリストテレスの哲
学において一番根本的な概念です。「実体」と訳され
たりします。「ホモウーシオス」というのは、実体、ウー
シアーが同じという意味で「同一本質」と訳されたり

します。ですから、「実体とは何か」という哲学的理解
なしには、実のところ、この信仰信条を正確に理解す
ることはできないのです。

ギリシア教父というのは、ギリシア哲学と同じ地統
きでギリシア語の文献を読む人たちのことです。ギリ
シア語の読める人ですから、当然、ギリシア文学も、
ギリシア哲学書も読めるわけです。しかも、信仰の内
容を表す言葉は（聖書も信仰箇条も）すべてギリシア語
です。そうすると、そこには当然、哲学で使われてい
る語彙も入ってくるわけです。

また、先ほどお話ししましたように、殉教の時代か
ら国の宗教の時代となっていくにつれて、キリスト教
の土台をしっかりと形作っていくために、キリスト教の
教義を体系化していく必要が生じてきました。そうす
ると、体系化するためにどういう枠組みを使うと便利
かということ、一番手近にあったのがギリシアの哲学だ
ったということなのだと思います。

皆さんご存知のように、聖書というのは、『旧約』に
しても『新約』にしても、いろいろな面白い話がたく

さん出てきて、そうしたエピソードを断片的に知ることはできるのですが、ではキリスト教は一体何をどのように信仰する宗教なのですかと尋ねられると、その答えを聖書に探してもなかなか見つかりません。聖書は決して教義書ではないわけですね。ですが、四世紀

当時は、これからちゃんと国の宗教として教義を確立し、体系化していかなければいけないという時期でした。『聖書』の様々な言葉を、互いに意味が齟齬し合うような箇所さえ全部意味を取りながら体系化していかねばなりません。体系化していく仕事が得意だったのは、言うまでもなく哲学でした。ですから、ヘレニズム期のアリストテレスの流れを汲むペリパトス派やプラトンの流れを汲むアカデメイア派、さらに新プラトン主義やストア派といったような様々な哲学学派の用語や考え方を教父たちは吸収し、それをうまく使いこなしていつて自分たちの教義確立のために活かしていったのです。その結果、ニカイア信条という最も根本的な信仰告白の中でさえ、ギリシア哲学の用語が中心的な役割を担うことになったわけですね。私たち日本

人が東方キリスト教、あるいはもっと広くキリスト教全体の核心を理解していくためには、かくなる次第で哲学的理解が欠かせないのであり、実はそこに難しさもあるわけですね。

三位一体論

三位一体論、すなわち父・子・聖霊という「三つのヒュポスタシス、一つのウーシア」という神理解の定式もまた、その哲学的な理解をめぐって多くの論争がなされました。まず、「三つのヒュポスタシス」から見えていきましょう。「ヒュポスタシス」というギリシア語はわかりにくいですが、ラテン語圏では「ペルソナ」と訳されます。「ペルソナ」は、英語の「パーソン」とほとんど同じです。そうすると、パーソンは人間の場合だったら「人格」のことですが、神の場合だったら「神格」でしょうか。だから、それを一応「位格」と訳して、「父と子と聖霊は三つの位格」というふうに言われます。ペルソナというラテン語は、もともとが「仮面」という意味です。西方キリスト教はラテン語圏ですか

ら、ペルソナという言葉を使うのは当然です。

しかし、東方の見方からするとこれはちよつと怪しい考え方です。一人の人間がある時は父の仮面を被つて、ある時は子の仮面を被つて、ある時は聖霊の仮面を被る、そういったニュアンスが「ペルソナ」という語の背後にはあります。同一の人間が幾つかの仮面を変えていくように、一なる神が三つの仮面をその都度被っている、すなわち一なる神の三つの顕現様態としての父・子・聖霊というような考え方は、神学用語では「様態論」と言いますが、その主唱者の一人であったサベリオスの立場（いわゆるサベリオス主義）は初期のキリスト教では異端とみなされました。元々「ヒュポスタシス」というギリシア語はどういう意味かという点、これも哲学用語ですが、「個としての存在」を表していました。ですから、「三一」とは、父としての個別存在、子としての個別存在、聖霊としての個別存在が、一つのウーシアー（本質存在）である、となります。

父、子、聖霊という三つの神の存在性は、各々それぞれも独立した固有の存在性格をもっているわけですが、

が、本質においてはあくまで一なる本質存在としてある。だから、そのことを先ほどのニカイア信条では「ホモウーシオス」と呼んでいましたが、これを仮に「同一本質」と訳しておく、それに対してもつと合理的な考え方として、ギリシア語で書くとイオーター一文字だけの違いですが、「ホモイウーシオス」という立場が登場します。「ホモイ（オス）」というのは「似ている」という意味なので、「相似本質」と訳されます。

父と子と聖霊というのがそれぞれあるとします。それが、一つだというのは非常に不合理な考え方です。三つと言っておきながら一つだと言っているわけですから。ところが、「ホモイウーシオス」というのは、父と子と聖霊は三つのものでありながらそれぞれが類似した本質をもっている、という考え方です。お父さんと息子が似ているというのは当たり前のことです。どちらも常識的には理解しやすいかというと、ホモイウーシオスの立場のほうが理解しやすいはずですが。しかし、当時のキリスト教会はこれらのホモイウーシオス派を異端とする方向に向かっていきます（正確には、

明確に異端とみなされたのは、父・子・聖霊が互いに本質の点で異なっているが相似しているという「相似派（ホモイオイ）」という立場です）。

ただ、この問題には教会政治が絡んできますし、東西の皇帝も絡んできます。例えば、皇帝が異端とみなされた相似派の司教を抱え込んで、その人を大きな都市の大司教に据えたりする。そして、正統と言われている同一本質派の司教を失脚させたりします。

そういうような混乱を経て、三位一体の考え方を巡っていろいろな論争が起きました。だからこそ、全地公会議を開いてニカイア信条とか、ニカイア・コンスタンティノポリス信条といったものを、その都度、全世界に表明していく、そういう必要があったわけです。

これは、非常に厄介な議論ですが、この議論をしていくときに、そもそもキーワードになっているのが「ウーシアー」だとすると、そもそもウーシアーとは何かという哲学的理解を抜きには語り得ない事柄なのです。

今日は詳しく話しませんが、哲学の世界のほうで言

うと、このニカイア信条に出てくる「ウーシアー」は、アリストテレスの哲学の影響を強く受けた概念として解釈する研究者と、新プラトン主義の立場の影響を受けた概念だという研究者がいます。いや、そうではなくてストア派の立場の影響を受けたものだという研究者もいます。ですから、宗教論争と哲学論争がいわば相互乗り入れしてくる形になるわけですが、話の内容そのものが哲学と言いながら全然合理性がないわけです。結局のところ、不合理なことをいかに合理的に語り得るかという厄介な命題を抱え込んだのが、三位一体論をめぐる問題なのだとも言えましょう。

キリスト論

では、この問題の焦点はどこにくるかと言えば、『父』である神については全く問題がないわけです。言うまでもなく、『子』であるキリストに論争の焦点は向かっていくわけで、当然これは「キリスト論」(Christology)へと話は進んで行きます。

キリスト論は、同時にマリア論とも重なってきます。

なぜかと言えば、キリストが神であれば、マリアは「神の母」（ギリシア語で「テオトコス」）になります。キリストが人間であれば、マリアはごく普通に人間を生んだ人間の母に過ぎません。そうすると、マリアの位置づけをどうするかというのも、キリストの位置づけと同じように問題となってきたわけです。

そこで、キリスト論をめぐる教義論争をしばらく見ていくことにします。

三一神をめぐる論争の焦点は、やがて、キリストのヒュポスタシス（ペルソナ）における神性と人性をめぐるキリスト論へと移行していきました。ここで強硬な反アレイオス主義の立場から、ラオディキアのアポリナリオスによって、子イエスの本性とは、受肉したロゴスという「唯一の神的本性」（ミア・フュシス）である、という主張がなされました。この主張はコンスタンティノポリス公会議において異端とされましたが、その後、子イエスの神性を強調するアレクサンドレイア学派とその人性を強調するアンティオケイア派の対立の中で、アレクサンドリア総主教キュリロスによってなされた、

キリストの二つの本性は神性に充たされることによつて「^{ミア・フュシス}一つの本性」になった、という表現は「単性論」の疑いを招くことになります。

要するに、ここでの問題は、キリストは神か人間かということです。アレクサンドレイア（ラテン語読みではアンティオキア）とアンティオケイア（ラテン語読みではアンティオキア）、この二つの地域が東方キリスト教圏では非常に強い勢力をもっていました。このアンティオケイアとアレクサンドレイアは全く対立する方向性をもっていました。アレクサンドレイア派は、キリストの神性を重視する傾向があるのに対して、アンティオケイア派はキリストの人間性、人性を強調する傾向性がありました。だから、アレクサンドレイアの総主教キュリロスは、できれば、キリストが「人間か神か」という問題を、神の側に引つ張つていきたいわけです。他方、アンティオケイア派側は、一方的にキリストを神の側に引つ張つて行かれると、自分たちが強調したい人性が薄くなるわけですから、それを何とか引き戻そうとするわけです。

例えば、キュリオスの立場に対して、やがて異端として排斥されるコンスタンティノポリスのネストリオスという人が反対を唱えました。このネストリオスは生まれがアンティオケイアでしたので、アンティオケイア派、つまり、キリストの人間性のほうを重視する立場から、先ほど言いましたマリヤを神の母、テオトコスと呼ぶことに反対しました。

そこで、キュリオスはエフエソス公会議においてネストリオスを異端として罷免します。何でテオトコス、神の母と呼ぶことにアンティオケイア派のネストリオスが反対したかというと、何度も言っているようにアンティオケイア派は人間性を強調したいわけですから、マリヤを神の母と言い切ってしまうと、イエスの人間性の部分が薄くなってしまう。そこで、何とかそれを押しとどめようとしたわけです。このように、マリヤの位置づけとキリストの位置づけはいつも相関しているわけです。

こういったテオトコス論争なり、キリスト論争が起こって来ましたが、やはり同じ東方キリスト教圏で両

者がいがみ合っているのはよくないということでは、の労がとられて、両派は和解しました。しかし、やはり両性論というのは矛盾したものを一つに納めようとする考え方なので、いつでも必ず分裂してしまう火種を残したわけです。やがて、エウテュケスという人によってキリストの人性は神性に吸収され、あくまでも外見上人間に過ぎないだけで本当は神の一つの本性しかもっていないのだという主張がなされました。これが、後に「キリスト単性論」と呼ばれるもので、キリスト単性論というとこのエウテュケスが創始者と思われされます。

ここで述べてきたように、単性論的な考えというものは、そもそもキュリオスの一つの本性というところから発しているわけです。しかし、この「キリスト単性論」というのは、四五年のカルケドン公会議において否定されました。そこでの決定によれば、「キリストは神性によるとすれば、父と同一の本質であり、人性によると我々人間と同一本性である」ということで、単性論ははっきりと信条によって否定されたわけです。さ

らにキリストのペルソナにあって、人性と神性は混ざらず、変わらず、別れず、離れないと規定されることによって、「キリスト両性論」が歴史上確立されたことになります。つまり、キリストの人間性と神性は決して一つにはならないし、かといって別々に独立に存在しているわけでもない。これもかなり無理な注文をしていることになりますが、これが、カルケドン信条としてずっと信仰の原理となっていくわけです。こういった形でキリスト教の根本教義の原型がここで築かれたということになります。

3 超越と内在の両立を可能にする靈性

洞窟の比喩

ここまではどちらかというと神学論争的な話をしましたが、これからはもう少し哲学に近づけて、なおかつ「東方キリスト教の靈性」ということに話を近づけていきたいと思います。イメージとしてわかりやすい言い方をすれば、私自身が東方キリスト教の最も根本的な靈性だと思うのは「超越方向と内在の方向の両立」

ということだと考えています。

超越とか内在というのは何を言っているのかというと、わかりやすいたとえ話として、プラトンというギリシアの哲学者の主著『国家』篇、岩波文庫にもなっています。その第七巻に、「洞窟の比喩」というのがあります。御存知の方も多いと思いますが、キアヌ・リープス主演の「マトリックス」という映画がありました。あの映画を監督したウォシャウスキー姉弟は、プラトンの『国家』をしっかりと読んで、「洞窟の比喩」を映画のモチーフに使ったと言われています。

どういうことかというところ、「洞窟の比喩」によれば、私たち人間は洞窟に住んでいて、洞窟の中に生まれながらにして手かせ、足かせ、首かせをつけられて身動きが取れない形で縛りつけられている囚人のようなものだというのです。この囚人は、生まれてからずっと洞窟の壁を見るしかないわけです。洞窟ですから、当然のこと、大変暗い。この人間たちがいる後ろに^{ついで}衝立があつて、衝立の後ろに松明が燃えている。その松明と壁の間を、歌舞伎の黒子のような人が、例えば馬だ

つたら馬の彫像みたいなものを持って動くと、それが囚人たちの眼前の壁に影絵となってその馬の影が映るわけです。すると、この人間は生まれたときから影しか見ていないのでこの影を真実だと思い込む。これは、もう少し現代的な言い方をすると、まさにバーチャルリアリティの話です。「マトリックス」という映画もそうでしたが、私たちの悩の中に映像をつくって、この世界が現実だと思わせているけれども、本当はその現実には影、バーチャルなものであって架空に過ぎない。同じように、洞窟の囚人も、もともと映っている影を見て「あれが馬だ」と思い込んでいるに過ぎません。この人はこの人で馬の影絵を競走させて競馬をやったりするわけです。そうすると、本当に競馬の馬が駆けているような気がしてお金を（もちろん影絵のお金を）賭けたりするわけです。そういうような生活をまさに現実だと思つて暮らしている。それが私たちの日常経験している感覚世界であり物質界です。

確かに、たとえバーチャルであつたとしても、「これは本物ではないですよ」ということを知らない限りで

は、幸せに生きていけるわけです。ところが、あるときこの人に決定的な転機が訪れます。「魂の向け変え」と言いますが、この囚人を振り向かせようと無理やり後ろに向けさせるわけです。そうすると、この人が今まで見ていた本物の馬だと思つていたものが、実は馬の彫像を映した影絵に過ぎないということが即座に理解されるのです。

しかし、この囚人はさらに洞窟の外へと連れ出されます。洞窟の外に何があるかというと、先ほどの馬の彫像のモデルとなつた本物の馬がいて、さらに本物の木、本物の池があり、その池に本物の太陽が映っている。洞窟にあつたのは、あくまで松明に過ぎませんから、言ってみれば偽物の太陽です。そうすると、この比喩の道行きは、洞窟の暗闇の中からだんだんと矯正されて地上へと連れられて行き、そこで初めて真実の存在に目を向けることができるようになるという話です。

つまり、人間は今いる状態から上昇していかなければいけないとプラトンは言うわけです。これが、プラ

トンの「洞窟の比喩」です。ちなみに、プラトンの哲学で言うところの「真実」こそ「アイデア」と呼ばれるものです。英語で「アイデア」、「理想」と言われるものの語源になります。アイデア、真実の存在とは、美そのもの、正しさそのもののように、この世界に存するすべての事態がそれを映した（分有した）に過ぎないような永遠不変な事態そのもののことであり、それらすべてのアイデアの頂点に立つのがこの太陽に当たるもの、すなわち善そのもののなのです。この太陽＝善そのものを魂の目で見ることによって、私たちはすべての真実を知ることができると思われます。要するに、この感覚経験世界に内在している状態から真実の世界へと超越することを説いているのが「洞窟の比喩」だというわけです。

このような考え方をプラトンはさらに次のように展開していきます。まず、この感覚経験世界を構成している物質性というものは、人間一人ひとりで考えると、人間の肉体、身体に相当します。身体にとらわれていた人間の魂を、身体から解放して、身体性を脱却して

いくことによって真実へと至る、そのプロセスが洞窟からの上昇・脱出に喩えられます。身体性というのは、例えば、様々な欲望、肉欲、情念、最終的には死、こういういったものをもたらしものですが、そのような一種の肉的・パトスの汚れを浄化していくことによって魂を解放していくというのがプラトンの考え方です。

「身体性と魂」が合一した状態で私たちは今いるわけですが、この欲望や情念や死をまとった身体から魂を脱却、解放することによって、魂が真実を観想すること、これこそが、宗教的な意味で言うところの救いになるのではないか。これが、プラトン哲学の基本的なテーゼです。

洞窟への下降＝キリストに倣うこと

日本でも奇岩群で有名なトルコの観光地カッパドキア、そこに四世紀頃、非常に著名な三人の教父がいました。カイサレイアのバシレイオス、その弟であるニュッサのグレゴリオス、バシレイオスの友人であるナジアンゾスのグレゴリオス、その三人の教父たち、「カ

ツパドキア教父」と呼ばれますが、彼らの中から、やがてこうしたプラトンの考え方に基づく伝統を転倒していくような考えが生まれることになります。

例えばニュッサのグレオリウスは、洞窟を脱出した人間が善そのものである太陽へと上昇するという話を、太陽そのものが洞窟の中に降りて来るという話に完全にひっくり返しました。言い換えれば、ギリシア哲学の理想、ギリシア哲学が最終的に目的としている「真実の観想」という超越への志向性が、完全に逆転され、内在志向へと向け変えられたのでした。では、教父思想においてこの逆転はどのような意味をもつのでしょうか。

プラトン以降、肉体性から脱却し魂を浄化・上昇させることによって、神、イデアを直視するという考え方が、人間の完成を「神に似たものになること」という形で追求していく伝統を形成していくようになります。神に似たものになるためには、そのような理想を否定する身体性から脱却しなければならないというのがプラトンの教えでした。東方教父たちも、このよう

な考え方を当然ギリシア固有の思想として引き継ぎます。しかし、東方キリスト教の霊性の特徴は、このように上昇する方向だけではなくて、もう一方の下降する方向においても人間性の理想を見出そうとします。

それが、ラテン語でイミタチオ・クリステイ、「キリストに倣う」ということです。つまり、キリストというのは善そのものであった太陽（神）が、洞窟の中へ降り来たり、人間となって肉をまとった、すなわち受肉した姿なのです。神がこの物質世界へと肉をまとい下降りし、最も低い者の立場に立ったわけです。神の子だからと言って決してお高くとまるわけではなくて、最も貧しい、虐げられている人々のところに身を置いたのです。

ギリシア語で「ケノーシス」、自己無化、自らを無にするということですが、キリストが最も下層のところを身を置いて人類の罪を背負って十字架に磔になることこそ、自らを無にするというケノーシスの手本にほかなりません。そのように最も低いところに身を落とし、自らを無にしていたキリストに学びなさい、真

似しなさいというのが、「キリストに倣うこと」イミタ

チオ・クリステイです。そうすると、神のいる天へと昇って行く哲学的上昇の方向、つまり、身体性からほとんどと離れていく方向と、キリストが受肉したことによって、上昇ではなくて、一番下層に身を置いていくキリストに倣っていこうという方向、これら二つの方向性が東方キリスト教の中に混在するようになっていくわけです。超越と内在という二つの方向が矛盾することなく両立していること、それこそが東方キリスト教の特徴ではないでしょうか。父なる神に似ることと、子なる神、キリストに似ることというのが同一の事態として人間に課せられていく。そういう理解が、東方キリスト教の理解だと思っています。

テオーシス（人間神化）

では、そういうふうに神を真似たら本当に神になれるのですか、そもそも神が何であるかもわからないのに神になれるのですか、という話になったときに、西方ではそう簡単に「神になる」なんてことは言わない

わけです。しかし、東方では、「テオーシス」、人間神化、人間が神になるということがしばしば語られます。その場合、神への超越の方法は恐らく先ほど見たように自らの身体性を離れていくことですが、ここにはプラトン主義からの影響ばかりでなく、ストア派からの影響も見られます。それがストア派の「アパテイア」という概念によるものです。ギリシア語で「ア」は否定の接頭辞で、それが情念を意味する「パトス」の派生語を否定しているので、「アパテイア」とは様々な情念から脱却すること、無情念、情念に動かされることのない平常心といった意味になります。こうして、超越の方向へとアパテイアを目指して修行を積んでいくような人々が現われてきます。それが修道士です。はじめにアトス山の修道士の話をしましたが、修道士たちは何をするかというと、ひたすら祈るわけです。これはイエスの祈りとか、心の祈りとか言われますが、ヘシカズムという東方の一つの典型的な実践思想に繋がります。「ヘーシキア」というギリシア語は「静寂」を意味するので、ヘシカズムとは「静寂主義」と訳

される心の平安を見出そうとする思想です。心の平安を乱すものは何か。怒りや悲しみ、苦しみといった情念です。

では、そうした悲しみや苦しみから解放されて、静かな心のあり方を持ち、自らの心を空っぽにすることが、なぜ、救いにつながるのでしょうか。それは、その空っぽになった心の中にキリストが入ってきて、そこに住まうから、つまりキリストと合一できるからです。キリストは、神性と人間性が合一したものの、つまり神人的存在であると同時に、身体を持った存在でもあります。そうであるなら、先ほどブラトンの発想にあった「身体から完全に解放されることで人間が救われる」という考えに対して、身体に起因するパトスから解放された後、身体性を伴ったキリストを自分の内に招き入れることによって救われるという別の考え方へと導かれます。

もちろん、人間の自力でキリストを招来することなどできません。あくまでそれは神の恩恵によるものです。しかも、神の側からの恩恵がいつ来るかはわかり

ません。しかし、いつ来るかわからないその日のために、ひたすら祈って自分の心を無にして待つ。そうすると、やがていつか神の恩恵がその心に満たされるといいうけです。

つまり、信仰における救いというのは、結局、神の側と人間の側のシユネルゲイア、協働だということです。完全に他力頼みで神様を待っているだけではなく、自らも何か修行を行っていく。しかし、自らの習徳修行によって、自力で救いが得られるかというところ、やはりそれは神からの恩恵なしには成り立たない。いわば、その協働エネルギーの合一というところでの救いが見出される。そのために、修道士たちは祈っているのです。

しかし、修道士ではない一般の人たちはどうしたらいいのでしょうか。そこで登場するのが、先ほどの「キリストに倣え」です。自ら受肉して、聖書に書いてあるように貧しい人たちのために身を挺して自らがその身代わりとなったその当のキリストに倣いなさい、彼に類似するものになりなさい。そうすることによって

自己無化し、自己を最も空しい存在へと変えていくわけです。キリストに倣う、そのことによって、やがてキリストが魂の内に入ってくれたときに救いへの途が拓かれるに違いありません。

修道士たちは基本的には超越・上昇の方向、普通の信者たちは内在・下降の方向。しかし、この二つの方向性を実際に何を目指しているかという点と、ある意味で自らの魂の内へとキリストの存在性を招き入れることと、キリストと合一すること、つまりは神化にはなりません。

復活

しかし、人間神化はたまさかのもので偶然起こるほんの瞬間的なことであって、永続性はありません。では、永続的にこのような状態を得るのはいつかという点と、死後です。そこで、「復活」という考えが次のテーマとなります。その際、ぜひ強調しておきたいことは、ニュッサのグレゴリオスなどを含めて、人間が身体性を脱却し、浄化された純粹な魂だけの存在になるとい

うような話には決してならないということです。まずパウロに倣って区別すべきは、「身体」（ギリシア語で「ソーマ」と「肉」（ギリシア語で「サルクス」）の区別です。「肉」・サルクスというのは、悪への傾向性を持った情欲その他のものです。対して、「身体」・ソーマというのは、人間が人間であるために必要不可欠な要素のことです。そうすると、人間は生まれたときにどのような状態なのか。

キリスト教でよく出てくるモデルは、第一の人（アダム）です。神が、アダムという人間を最初につくった。アダムはどんな状態にあったかというと、最初は樂園にいたわけです。罪を犯して、今の私たちのようになつてしまったわけです。そして、熱中症になつて倒れたりする。

ところが、樂園時代のアダムはそんなことをしなくても、食べ物でも何でもいくらでも手に入った。そのアダムが罪を犯して、そして人間に死が訪れるとなつたときに、彼の身体性はどのように変遷していったの

でしょうか。まず、アダムには元々ソーマ（身体）が備わっています。つまり最初はソーマ（身体）と魂が結び合って存在していましたが、こういったあり方が、罪を犯すことによつてサルクス（肉）をどんどん身に帯びていく、つまり肉欲に溺れるわけです。そして、死ぬときに、当然、ソーマ（身体）は解体し腐ってなくなつてしまいます。

けれども、キリスト教では「復活」が信じられています。一体、この復活というのは何が復活することなのでしょう。生前、私たちは肉と身体と魂をまわっています。パウロによれば、復活するときには、肉を死によつて消滅させ、この身体を霊的な形で復活させると言われます。つまり、霊的身体と魂の合一したものが人間として復活して永遠の生を得るわけです。こういう身体と肉の段階性をニュッサのグレゴリオスは提唱しています。

そうすると、先ほど言ったプラトンのように身体性を脱却して精神単独になつて真実に到達するという哲学的な超越の方向に対して、キリスト教の考え方は最

も永続性を持った救済の対象となるその死後の生においてさえ、身体性を不可欠なものとするという立場を取ります。もちろん、この身体性はどのようなものかというのは哲学的な考察が必要ですが、魂だけではなないということが注目すべき特徴です。

では、このような人間の復活が可能になつたのはなぜかという点、それが霊的身体と魂の結合体、つまり、人間の人性と神の神性の両性を自らの本性としたキリストが私たちの前に存在していたという信仰上の事実です。この事実、史的事実かどうかはともかく、少なくとも信仰者にとつてリアリティをもった受肉という出来事が、人間の復活を可能にしているのです。

こうした身体の復活の話と、これまでの私の話を一つに纏めて見ていくと、私たちが東方キリスト教の霊性として、どのようなものを読み取っていったらいいか、自ずと明らかになると思います。最初に東方キリスト教の霊性の特徴は、受肉した霊的身体的存在であるイエス・キリストとの交わりだと言いましたが、その霊的身体的存在であるイエスとの全人格的な交わり

によって、人間自身の中にも霊的な身体性を取り返して、それを死後、永遠に身にまとうことによって、人間は永遠の救いを得るところに、東方キリスト教のある種の霊性の特徴があるということになります。

東方キリスト教には、ある意味では、キリスト教の原型を現在にも色濃く残している面が多々あると思います。だからこそ、東方キリスト教には、私たちが普段接しているカトリックやプロテスタントなどの西方キリスト教とは違った様々な興味深い要素がまだまだたくさんあります。

例えば、宗教美術に関心がある方なら、イコンの話をお聴きになりましたかっただけでしょうし、東方典礼（奉神礼）に関心がある方なら、もつと典礼の具体的な話をお聴きになりましたかっただけだと思います。本日、私がお話したことは、そうした東方キリスト教の魅力のほんの一部に過ぎません。哲学なども絡めてやや抽象的な話に偏ってしまったかもしれませんが、私が今日申し上げたかった「東方キリスト教における霊性」とは、大

体以上のようなことです。ご清聴ありがとうございました。

（つちはし しげき／中央大学教授）

※2015年7月28日に行われました。